

こどもと健康

NO・142

2014・1・6

あけましておめでとうございます！

インフルエンザ流行は年明けか？

インフルエンザは毎年多かれ少なかれ流行がありますが、今のところ大阪府ではインフルエンザの大きな流行はなく、感染症サーベイランスでも12月16日から22日の第51週に大阪府下309の医療機関から269例の報告があり、定点当たり0.88、堺市0.50と流行の始まりとされる1.0を下回っています。堺市でも散発的に見つかりますが、流行には至らず、2学期の学級閉鎖はありませんでした。当院でも今シーズンになって3名です。しかし、地域によっては流行の兆しがあり、全体としても次第に増加してきています。年末年始の9日間に泉北急病診療センターを約2,800名が受診されましたが、インフルエンザは70名程と例年より少なくなっています。例年大阪では12月になって流行が始まり、年明けから3月頃が流行のピークですが、今年は若干遅れそうです。

全国的にみると、第43週以後インフルエンザは増加が続いており、第51週の定点当りの報告数は1.39と全国的な流行開始の指標である1.00を初めて上回りました（ちなみに、昨シーズンは第50週）。都道府県別では山口県5.12、鹿児島県4.67、高知県3.92と西日本に多く、大阪府で0.88で全国平均を下回っています。学級（年）閉鎖も全国では365校に及び、大阪府では22校になっています。

全国の衛生研究所で分離・検出されたウイルスはA香港型が56%、AH1pdm09（2009年に大流行した所謂新型）が23%、B型が20%となっており、堺市衛生研究所では全ての型が検出されています。今後、どの型が流行するかは今のところ予想がつかない状況です。

11月19日に国立感染症研究所から全国4,950名のインフルエンザ抗体の保有状況が報告されました。それによると、4年前に大流行したAH1pdm09（以前、新型と言われた）は罹患した多くの人たちには依然抗体が残っており、5～24歳では60%以上が抗体を有しているが、5歳未満では20%台でした。AH3N2（香港型）も5歳未満が20%台と低く、保育所・幼稚園での流行が懸念されます。

流行が始まるまでにワクチン接種をしておくとは少しは安心ですので、年末に1回目を接種した方は2回目の接種を、13歳以上の方は1回接種ですので、早めに接種しましょう。当院ではワクチンに若干の余裕がありますので、接種ご希望の方は診療時間中に電話で予約して下さい。

みずぼうそうワクチンと

成人用肺炎球菌ワクチンが定期接種に！

年末に開催された厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会でみずぼうそうワクチンと成人用肺炎球菌ワクチンが平成26年度中に定期接種化される見通しとなりました。これは、昨年4月に改正された予防接種法でこの2ワクチンとおたふくかぜワクチン、B型肝炎ワクチンを定期接種する予定となっていました。2ワクチンが先に定期接種化されることになりました。詳細は今後議論されますが、みずぼうそうワクチンは1～2歳に2回接種になりそうです。成人用肺炎球菌ワクチンは接種対象年齢、一部負担金などが議論される予定です。議論が順調に行っても実施は秋以降になりそうです。

みずぼうそうは感染力の強い病気ですので、1歳を過ぎたら定期接種化を待たずに有料ですが、任意接種を受けましょう。

子宮頸癌予防ワクチンの 接種勧奨差し控えは継続中！

昨年4月からの予防接種法改正により、定期接種となった子宮頸癌予防ワクチンが複合性局所疼痛症候群（CRPS）の疑い例が報告されたので、昨年6月から接種勧奨が中止されてきました。その後、CRPS症例は130例（他に、患者会や文科省等に110例）、10万接種当たり1.5例が報告され、因果関係が調査されましたが、ワクチンとの因果関係に対する結論は出ませんでした。従って、接種勧奨は継続して一時中止されています。同じワクチンが世界中で接種されており、諸外国でもCRPSの報告はあるようですが、日本程多発している国はありません。年明けから再検討される予定ですが、見通しは立っていません。

小児用肺炎球菌ワクチンの補助的追加接種！

昨年4月から定期接種となった小児用肺炎球菌ワクチンが11月から7価から13価ワクチンに強化されました。93種ある肺炎球菌のうちこれまでは7種でしたが、13種が入ったワクチンが接種できるようになったのです。1回でも7価ワクチンを接種した場合も、11月1日以降に接種する時には13価ワクチンを接種します。初回3回と追加接種の4回接種は変わりません。尚、既に7価の接種が終了した6歳未満の幼児も残りの6種の免疫をつける為、1回だけ任意接種（有料で12000円）を受けることができますので、ご相談下さい。

肺炎球菌はありふれた細菌ですが、乳幼児が罹ると髄膜炎、敗血症、肺炎等の重症肺炎球菌感染症となり、命にかかわることがあります。肺炎球菌は常在菌と言われ、保育所園児のノドを検査すると4カ月児17%、7カ月児28%、10か月児36%、1歳6カ月児48%が保菌者であったというデータもあります。保菌者は無症状ですが、免疫力が低下すると、発病することがあります。7価の小児用肺炎球菌ワクチンが公費負担で接種が始まって3年目になります。ワクチンに含まれる7種による重症感染症は10分の1以下にまで減少しましたが、ワクチンに含まれないものは変化がありません。生後10カ月までに半数が3歳までに80%が一度は保菌すると言われます。既に接種が完了していても集団生活をしている6歳未満児は1回接種（補助的追加接種といいます）を受けるようにしましょう。尚、高齢者に接種される成人用23価肺炎球菌ワクチンは全く別物ですので、小児には接種できません。